

---

# 自己を語るという経験

## 「第2回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」報告

(2013年8月2・3日鹿児島市宝山ホール)

坂本英樹 (どもる子どもの親、教員、NPO法人大阪スタタリングプロジェクト)

---

### はじめに

#### 吃音講習会の趣旨

北は栃木から南は沖縄まで40名を超える、ことばの教室を主とする教員、言語聴覚士、どもる子どもの保護者、当事者が鹿児島市に集まった。

冒頭、大会実行委員長の溝上茂樹さん(鹿児島県知名町立知名小学校)は、仲間と出会い、その仲間と語ることを通して、自身の吃音との向き合い方や吃音観が変わっていったことをあげ、この講習会は「どもる子どもたちと、吃音の何を学び合い、どう取り組むか、参加者の皆さんと一緒に学び合い、考えていく講習会だが、参加者自身の疑問や考えをプログラムに反映させるミステリーツアーのような講習会です」と挨拶をした。

この挨拶には昨年、千葉市で開かれた第1回の吃音講習会がナラティブ・アプローチの手法に学び、「吃音否定から吃音肯定への吃音の取り組み」をテーマとした総花的展開だったことを受け、今回は Narrative = 語り、物語るとはどういうことかを、どもる子どもはもちろんのことだが、参加者自身のこととしても追及しようとの意図が込められている。

第2回の講習会のテーマを「子どもとともに、言葉を紡ぎだすー当事者研究、ナラティブ・アプローチ、レジリエンスの視点からー」とした理由である。

---

### 基調提案① それぞれの生きるかたち

国立特別支援教育総合研究所 牧野泰美さん

---

#### 牧野さんの生きるかたち

昨年の講習会の講師であった発達心理学者の浜田寿美男さんは「障害と子どもたちの生きるかたち」(岩波書店2009年)という著作のなかで、「明日のための発達より、いまの手持ちの力で生きる生活を大事にしたい・・・発達の遅速や能力の上下に気をとられるよりも、それぞれの背負った条

件のなかでの生きる論理を大事にしたい」と述べている。牧野泰美さんの講演はこの浜田さんの著作の主張を受けるかたちで始まった。

牧野さんにとっての生きる論理、生きるかたちの模索は自らの名前との向き合い方を端緒としている。「やすみ」と名づけられた名前に学齢期の牧野さんはコンプレックスを感じて過ごした。現在と異なり男女別の名簿だった時代、年度当初には決まって、「やすみちゃんかな?やすみくんかな?」と教員から呼ばれることが恥ずかしく、嫌でたまらなかった。また、級友からは、「やすみ君は『お休み』なのにどうして登校しているの?!」といってからかわれた。しかし、いつの頃からかこの名前を「いいもんだ」と思えるようになった。

それは名前を変えたわけでも、男らしい名前、女らしい名前というような名前に対する社会の支配的な文化コードというのか、意識の幅がひろがり、変化したことによるのでもなく、牧野さん自身の名前に対する捉え方、視点が変わったことによっている。言語に関する研究者である牧野さんにとって、いまやこの「やすみ」という優しく響く名前は人に自分の名前を覚えてもらうための有効なツールとなっている。おそらく日本で一番、ことばの教室担当教員の知り合いが多いのも、この名前の響きが一役買っているかもしれないと、牧野さんは理解しているのである。

自分もつ何らかの課題や障害というものに対して、治すとか、なくすというような対処の仕方もあるだろうが、見方を変えることで案外とうまくつき合えるのではないかと、という提案である。

しかし、自分の慣れ親しんだものの見方、ナラティブ・アプローチでいうところのドミナント(支配的な)・ストーリーからしたら私たちは自由になれるのか。

牧野さんは比喩的にそれを「殻ごと大きくなればいい」と表現する。幼い頃の牧野さんは家族以外の人がいる場面では極端に話すことを避けていた子どもだった。学校で何でもいいから話してごらんと教員に促されても、発言することはなかったという。しかし、もし教員が自分自身について

語ってくれたら、自らを開いていてくれたら、話していたかもしれないと現在の牧野さんは分析する。言葉は関係性の中で生まれ、伝えられることを当時の牧野さんはすでに直観していたのだろう。

やがてちょっとした自信や勇気がもてた経験の積み重ねのなかで、牧野さんはひとつまた一つと外の世界を自分のなかに取り入れていった。自分の殻を破ったわけではないが、殻を少しずつ大きくしていった、キャパシティをひろげたのだ。結果として殻を破ったのも同然であろう。

吃音について直接触れることはないがと最初のことわって展開された牧野さんの話は、2 日間に渡る講習会の補助線を引く役割を果たしてくれた。

---

## 基調提案② どもる子どもにとっての 当事者研究とレジリエンス 日本吃音臨床研究会 伊藤伸二さん

---

### 吃音臨床から

吃音に悩みに悩み、治そうと一大決心をして民間の吃音矯正所である東京正生学院の寮に入所した 21 歳の伊藤伸二さんは、上野公園の西郷隆盛の銅像前で習った方法に従って演説をしていた。それから約半世紀を経て、今度は「吃音とともに豊かに生きる」ことを提案するために、全難言鹿児島大会での全体講演に続いて、吃音講習会での基調提案の機会を迎えていた。再び西郷隆盛像の前に立ったのである。人生の巡りあわせの不思議を感じながら、伊藤さんは吃音臨床の 100 年間を概観し、今後の展望を語った。

1903 年の伊沢修二によって設立された楽石社における「不自然でも、どもらずに、ゆっくり話す」という方法を最初と考えることができる世界の吃音治療・臨床は、その後、アメリカのアイオワ州立大学に集まる研究者たちによって極められたが、伊藤さんはそこから今日、私たちが学ぶべき考え方は 2 つしかないかと総括する。

1950 年に提唱された、ウェンデル・ジョンソンの言語関係図と 1970 年のジョゼフ・G・シーアンの吃音氷山説とである。

W・ジョンソンは吃音の問題はどもり方の状態である吃音症状 (X 軸) と、それに対する聞き手の反応 (Y 軸)、そして吃音に対する本人の意味づけ・態度 (Z 軸) からなる立方体によって表す。そして、各軸を短くすることで吃音の問題は解決することができる考えた。

シーアンはこの Z 軸に注目、発展させて、吃音

を海面に浮かぶ氷山にたとえると、吃音の症状自体は海面上に見えるわずかな部分であり、吃音の問題の本質は外からは見えない、隠れた海面下の大部分にあると主張した。

しかし、アメリカ言語病理学は、Z 軸と海面下の部分への具体的な取り組みを展開することなく、両説を忘れたかのように吃音症状へのアプローチに終始し、現在に至っている。

### 伊藤さんの歩みと思索

東京正生学院での同じ悩みを持つ仲間との語り合い、大阪教育大学の聴覚・言語障害教育課程の教員時代の徹底した議論、全国吃音巡回相談会での多くの出会い、そしてセルフヘルプグループでの実践を通して、伊藤さんたちは吃音に対する否定的な言説、ドミナント・ストーリーに代わる、吃音とともに豊かに生きているという肯定的な、オルタナティブ・ストーリーを発見し、紡いでいった。

そして、吃音症状といわれるものと吃音の悩みは比例しない、吃音否定による自己理解が悩みを深くすること、どもりを通しての自己理解、吃音とともにどう生きるかが吃音の課題の核心であるとの洞察を得た。「吃音を治す努力の否定」という 1976 年の「吃音者宣言」の哲学を確立した。

伊藤さんは、シーアンの海面下の部分を、どもりを隠そうとしたり、話す場面から逃げるといったような「行動」、どもりは悪いもの、劣ったものであるとする「思考」、どもるとみっともない、恐ろしいという「感情」、そして、話すときにこわばってしまう「身体」と整理する。

そして、この海面下の部分は、他の誰でもない自分自身の日常生活の営為を通して形成されたわけであるから、セラピストのような専門家と呼ばれる人たちに委ねるのではなく、当事者としてこの部分に働きかけること、向き合うことが吃音の課題へのアプローチであると喝破した。

大阪吃音教室の 40 年は、当事者として自身の課題に向き合う「当事者研究」の積み重ねであるといえる。交流分析や論理療法、認知行動療法、アサーティヴ・トレーニング、竹内敏晴・からだことばのレッスンなどに学びながら、共同の営みとして実践してきたのである。

それを通してメンバーは、吃音を治したいと思っていた頃は確かに悩んでいたかもしれないが、自分の人生の課題からは逃げていた、どもりに甘え、言い訳にして劣等感を持ち、アドラー心理学でいうところの劣等コンプレックスに陥っていた

ことを悟ったのである。吃音とともに生きる今は吃音で苦勞することはあるが、人生の課題からは逃げずに生きているとの実感と誇りを持っている。大阪吃音教室の雰囲気が真面目でありながらも、明るく、ユーモアにあふれ、常連メンバーに人としての成熟があるのはそれゆえであろう。こうしたあり方は、べてるの家なら「苦勞を取り戻す」と表現されるものである。

べてるの家の創立者である、向谷地生良さんが2011年の秋、吃音ショートコースに招かれて、吃音に関する伊藤さんたちの実践に触れて、「こんなところに脈があった！」と驚嘆したのは、同じ問題意識を両者が持ち、当事者研究を行っていることを発見したからに違いない。

### 吃音世界大会から

吃音者宣言から10年後、1986年に伊藤さんたちは京都で第1回吃音問題研究国際大会を開催し、世界のどもる人たちに向けて自分たちの考えを問うた。今年の6月、第10回のオランダ大会のテーマは第1回の大会に通じる、「吃音に関するあらゆるタブーを打ち破れ」というもの。伊藤さんはそこで「吃音否定から吃音肯定の語り～ナラティブ・アプローチの提案」という基調講演を行ったが、この提案を最も真摯に受け止め、共感したのがデヴィッド・ミッチェルという邦訳されている著作もある、現在はアイルランド在住の世界的なイギリス人作家である。

9年間の日本在住経験のあるミッチェルさんとの対話は、彼が伊藤さんたちを訪ねて来たことで思いがけずに生まれた。難しい言い回しや単語は日本吃音臨床研究会の国際部長である進士和恵さんがサポートしてくれた。

ミッチェルさんはどもりを征服すべき敵と考え、戦いを挑んだが、逆にどもりもミッチェルに戦いを挑んできた。それはある意味で自分の内なるもの、身についたものに対する戦いであり、終わりのない戦争、内戦であったという。この自分が壊れるほどの戦いにミッチェルは疲れきり、絶望した。伊藤さんの言い方だと「諦める」ということだろう。しかし、この絶望は自分の内なるものとは共存するしかない、友だちになるしかない、どもりに対する見方を変えることを促した。今ではどもりに感謝さえしている、もし治る薬があったとしても飲むことはないと言っている。それは言葉を選び、言いかえをしてきたサバイバル体験が彼の言語を豊かにし、作家としての彼を育てたからである。違う文化的風土にありな

がらも、ミッチェルさんのどもりとの折り合いのつけ方、つき合い方は伊藤さんと驚くほど共通するものだ。

### 子どもがもつレジリエンス

ミッチェルさんが行っていた言葉の言いかえや少し間を置いて話すことなどは、どもる当事者なら誰でもしていることだろう。誰かに教えてもらったものではなく、自分自身の工夫として、サバイバルとして身につけたものだ。

流暢性促進技法などはこの域を出るものではない。それをことばの教室や言語聴覚士が言語指導として子どもに訓練させることはあってはならないのではないか。子どもの生き生きとした表現を奪うことになると伊藤さんは主張する。では、何をすればいいのだろうか。

吃音親子サマーキャンプは大阪吃音教室のエッセンスの凝縮された、参加する子どもたち同士による二泊三日という当事者研究の場である。同年齢に近い仲間同士での話し合いや劇制作、ウォークラリー、ベッドの中での会話などを通して、それぞれの体験と考え方、言葉を分かち合うという経験をする。

子どもたちは、どもりをからかうクラスメイトもいるが、支えてくれる友だちもいること、からかいへの対処法もいろいろあるということ、どもりだからキャンプに来ることができた、こうして親友となったあなたに会えたのはどもりのおかげであるということまで発見する。

そうして、エネルギーを充填して、新たな意欲で9月からの新学期を迎えるのである。子どもたちがお互いのなかに確認するのはレジリエンス(resilience)という苦難に耐えて自分自身を修復する力、回復する力である。学生時代の伊藤さんが一ヶ月ごとにアルバイトを変え、一人当事者研究をしていくなかで発見したのもこのレジリエンスである。

吃音親子サマーキャンプは来年で25回目となる。これだけ長く続けてこられたのは、子どもの見せるレジリエンスに伊藤さんをはじめとするスタッフの誰もが魅了されているからであろう。子どもたちが見せるユーモア、豊かなサバイバル術、しなやかな考え方は子どもたちには、自分の環境をたくましく生き抜いていく力があることを示している。

吃音臨床の世界には、言語関係図における聞き手の反応であるY軸へのアプローチから「環境調整」という考え方がある。しかし、子どもは一方

的に環境を調整されなければならない存在なのか。子ども自身が環境に働きかける能動的存在であることを忘れていないのか。

確かにどもりについて、どもる子どもについて親や学校に理解してほしいこと、考えてほしいことはある。しかし、環境調整といわれると、どもる子どもをもつ親は日々の生活の中で、どうしてもゆっくりとしたペースで子どもに話しかけられなかったというような場面ばかりが思い出されてしまうことだろう。その結果、子どもによい環境を家庭において提供できないでいるという罪悪感を抱いてしまうことになる。自分に対して罪悪感をもちながら接してくる親は、どもる子どもに何を伝えていることになるのか。ここから吃音否定の語り、物語りが生まれるのである。

### どもりの歌

洋の東西を問わず、人口の1%の人がどもる。だとすれば、この1%の存在には意味があるはずだ。伊藤さんは最後に、「どもりの歌を歌いたい」として次の一節を紹介してくれた。

「治らないから受け入れるという消極的なものではなく、いつまでも治るにこだわると損だという戦略的なものでもない。どもらない人に一歩でも近づこうとするのではなく、私たちはどもる言語を話す少数者として、どもりそのものを磨き、どもりの文化を作ってもいいのではないか。どもるという自覚を持ち、自らの文化をもてたとき、どもらない人と対等に向き合い、つながっていいのではないか」

（『新・吃音者宣言』芳賀書店1999年）

どもりの文化、どもりの意味を探求する当事者研究への誘いであろう。

---

## 記念講演 自分らしい臨床を行うための

### 『当事者研究』入門

#### ～自分の中にある宝物に気づくために～

#### 九州大学留学生センター准教授 高松里さん

---

### 当事者研究の理論的背景

ナラティブ・アプローチをベースに当事者研究に取り組もうと伊藤さんは提案する。では、自己を語る、物語るとはどのような行為なのか。高松里さんは「自分自身の経験」を基にそれを丁寧に理論編と実践編にわけて、絵解きしてくれた。

人が臨床心理士などの心理職になろうとする動機には何らかの自分自身の課題があることは少な

くないが、臨床の場では心理職が自らのことを話すのはタブーとされている。それゆえ、心理職はいつしか自分のことが話せない、語れなくなってしまふ。しかし、心理職へと導いた自分自身の問題・経験の中にこそ、何らかの課題をもつ当事者、子どもと向き合うための資源がある、高松里さんの表現だと「宝物」があるはずである。

この宝物を探求する方法としての当事者研究の理論的背景として高松さんがあげるのが「ナラティブ・アプローチ」と「ライフストーリー」である。現在、高松さんは九州大学の留学生センターのカウンセラーであり、留学生と日本人学生の異文化交流の場を勤め先としている。ほとんどの留学生は日本にやってきて、おそらくいろいろなことに困っているのだろうけれどなかなか相談に訪れることができない。それは何を相談していいのか、どう言葉にしているのかわからないからであろう。このわからない、語れないという状況を高松さんは異文化体験と定義する。

実はナラティブ・アプローチは異文化体験を背景に編み出された方法である。言葉にできない、語れないものにかたちを与えよう、言葉を紡ぎだそうという試みであり、そこから豊穡な生が立ち現れてくるという生の技法である。

ところで、異文化理解という言葉は語義矛盾している。異文化とは語れない、理解できないものことであるから。たとえば、いじめ、不登校という経験も異文化であろう。なぜいじめられるのか、いじめる理由、原因は加害者側が勝手に作りだすものであるからそもそも被害者にはその理由はわからない。なぜ登校できないのか、周囲も当事者もそれを納得できるように説明することは難しい。

どもるという経験も同様なのではないか。なぜどもるのか、明確な原因があるわけではない、コントロールすることも困難な自分の中の他者であるかのようなどもり。だから語れない、相談ができない、説明ができない。

語れないということは、自分の人生航路のなかでその部分だけが前後の経験から断絶している、「ライフストーリーの中断」状態にあることであり、その経験を他者と共有できないことによって、通常の世界から当事者が孤立するだけでなく、自分自身からも疎外されていることを意味している。

当事者が自己とこの世界との結びつきを回復するためには、その経験を言葉にできること、語ることが必要だろう。しかし、自問自答の語りでは

砂漠で迷う旅人のように同じところに戻ってくるばかりだ。その語りを聞き取る誰かの存在、証人となってくれる誰かが必要だ。セルフヘルプグループの意味はここにある。

心臓病と癌を経験し、「病い」を生きる意味を探求したアーサー・フランクは「傷ついた物語の語り手」（ゆみる出版 2002 年）において、「病いの語り」を「病院に行って薬を飲んで治りました」というような「回復の語り」、病いの現実を翻弄され、一貫性も統一性ももたない断片的な「混沌の語り」、そして病いのもつ意味を見出し、自己の物語へと組み込む「探求の語り」の 3 つに整理している。

当事者がまず初めに語りだすのは、繰り返しや言いよどみの多い、矛盾に満ちた、アーサー・フランクがいう「混沌の語り」であろう。

混沌の語りの場合、証人である聞き手はその語りをカウンセリングの世界でいわれる傾聴や共感というような聞き方ではなく、アクティブな聞き方が求められるのである。ナラティブ・アプローチにおいては語り、物語りは語り手と聞き手との間に成立する共同作品であると理解される。語り手はまだ言語化できないことを聞き手から尋ねられ、前後の脈絡を確認され、整理され、再定義されるなどして、ようやくその経験の輪郭を掴み、意味を把握することができるようになっていく。語りは聞き手との共同作業によって変化、生成していくのである。すべてのインタビューはアクティブ・インタビューなのである。

ナラティブ・アプローチにおいては「自己とは自己語り」であると理解されている。人格という確たる実体があるとは理解しないのだ。

たとえば、伊藤さんはこういう場や著作において繰り返し、自分の人生を語っているが、その度に他の事項との関連が新たに加わり、まるで成長しているかのようなストーリー展開になっている。語る度にどもりを通した伊藤さんの人生の意味が更新され、明らかにされている。オルタナティブ・ストーリーが紡ぎだされているのである。

小学 2 年の時に学芸会でほとんど台詞のない役をした、21 歳で東京正生学院に入った、大教大の教員になった等々、伊藤さんの人生の出来事を並べてもそこから伊藤さんの人格、人生の意味が明らかになるわけではない。それらの出来事をどうつなげ、どういう観点から語り、意味を見出していくのかという「探求の語り」によって、その度に伊藤さんの人生、人となり立ち現れてくるのである。

人はライフヒストリーとしてではなく、ライフ

ストーリーを生きている。言葉を通した他者との相互作用のなかからその人の人格、人生が明らかになるのである。言葉は世界をつくり、私は物語りとして存在しているのである。

### 高松さんのライフストーリー

高松さんは理論編の次に実践編として自身を例に「ガン騒動」を巡るライフストーリーと「色覚マイノリティ」についての当事者研究を語った。

「私が他の人に自分についてわかってもらいたいと思ったときには、この『ガン騒動』の話をしています」として、1999 年の暮れに「十二指腸ガン」が疑われ、一ヵ月後に入院してそのまま手術を迎えるばかりだったのだが、再検査によって疑いなしと判断された「ガン騒動」についてのストーリーを語ってくれた。

予後不良とされる十二指腸ガンであると思っていった一ヶ月間、「死」を意識するなかで、高松さんはたとえばすれ違う散歩中の老人を見つめながら、なぜこの人は長寿なのかとか、部屋の荷物を誰にあげようかなどと思いを巡らせつつ、術後の残された時間のなかでは「『何がしたいか』よりも『何がしたくないか』が大事だ」と考えていた。

誤診とわかってから高松さんの生活はある意味ではシンプルになった。「やりたいことは先延ばししない」、「人からの評価は、墓場に持って行けない」という方向性のもとに年賀状や公式パーティーの出席などの儀礼的なつき合いや学会の理事などの求められる組織内の役割も全部辞めた。

代わりに始めたのが、コーヒーの焙煎、自転車に乗ること、欲しかったマーチンのギターを買い、ライブを始めたこと、沖縄、特に波照間に通うこと等々。そして、会いたい人には会い、行きたいところ、行くべきところには行こうということ。沖縄戦下で日本軍によって集団自決を強要された場所である沖縄のガンマ、アウシュヴィッツ・ビルケナウ絶滅収容所、アジア、アフリカの各地等々。もちろん、著作も上梓した。

大学以外にも多くのセルフヘルプ、サポート・グループの活動やエンカウンター・グループにも参加してきた高松さんにとって「ガン騒動」という人生のうえでの断絶は、もしかしたら多忙からバーン・アウトしていたかもしれない状況から避難し、「何のため誰のために働いているのか」と立ち止まる機会を与えてくれた。また、「何かを手放すということは、何か別のものを手に入れること」であるという洞察をもたらしてくれた。

高松さんはこれまで繰り返し、このストーリー

を語ってきたという。それは自分のことを「他者に理解してもらう」こと以上に、「他者とこのストーリーを共有することで、自分で自分のこれまでの人生を理解する」ためでもある。語る度に内容が少しずつ変化していくのは、その時の高松さんにとって腑に落ちる、フィットする、より深い了解が可能なストーリーを探求、構築しているからなのである。

### 高松さんの当事者研究

高松さんの当事者研究は、かつては「色盲」と呼ばれた見え方に関する課題についてのものである。進学、就職に関して制約があり、遺伝であるのに毎年繰り返される健康診断で検査を受け、にもかかわらず、何の配慮もない時代に学校生活を送った。恥ずかしいとも思い、偏見も恐かったことから、誰にもこの経験を語れずにいた高松さんは大学に入って初めて、言葉にするようになる。焼肉の焼け方がわからないというような日常生活において困っていることや結婚差別への不安というような自分の経験をリストアップしていった。こうしたなかで出会ったのが当事者研究という方法である。

当事者研究は、障害や何らかの課題をもつ当事者が仲間と共に自身の課題を研究することで、語れなかったものに対する表現を見つけ、語りを取り戻す実践である。語ることはその課題の意味づけを変え、自己を再定義する試みであり、他者との関係を再構築することにもつながっていく試みである。

語りにはそれを聞き取る他者の存在が求められるわけであるから、誰に向かって語るのかが重要な観点である。そのステップとしては、同じ経験をしているものだからこそわかる言葉、表現で語り合える「当事者同士での語り」、ことばの教室の教員と通級してくる子どもとの間で交わされるような当事者同士での語りより、もう少しひろげられた言葉、語りになっている「当事者以外の人の語り」、そして、クラスや全校生徒の前で自分のどもりについて話をするような「多くの見知らぬ人への語り」である。

NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトが懸賞募集している「ことば文学賞」のようなどもりや言葉についての文学作品も多くの人に読まれるという点で、また自分の経験について表現を選び、伝わる言葉で語るということにおいて、「多くの見知らぬ人への語り」であるといえよう。

この段階において、当事者の経験は社会に還元

される。紡ぎだされた言葉は鍛えられた社会化された言葉であり、社会的資源として活用可能な経験となる。また、まだ見ぬ同じ課題をもつ人への呼びかけであり、励ましでもある。こうして当事者は世界とのつながりを取り戻し、人としての尊厳を回復することができるのである。

さて、高松さんは自分の経験を明らかにするためにいろいろな本を調べた。しかし、「断片的な手記や体験談があるが、一人一人の経験の吟味や、人生観への影響などについては語られていない」ことを知る。一方、吃音と同様、治すという妙な道具や訓練法まであるのだ。第一、自分の課題をどう呼ぶのか、適切な表現、言葉が見つからない。「色盲」では色が見えないことになる。「色覚異常」では異常者だと言われているようなものだ。障害は社会的につくられるものなので「色覚障害」は成立しないだろう等等。呼び方がない、名前がないということ、そもそもその問題が存在しないということであり、同じ課題をもつ人々と出会えないということ、誰とも問題共有ができずに、他者、社会から疎外されることである。結果としてその経験や言葉も蓄積されない。

高松さんは自身の課題を「色覚マイノリティ」と自己命名をすることにした。その経験を繰り返し語ることで、高松さんの言い方だと「雑巾がけ」をすることで、この課題に対する「探求の語り」は磨かれ、高松さんに多くの意味をもたらしている。語り、記述は厚くすることが求められるのである。そして、マイノリティという言い方によって、高松さんの視線は他のマイノリティの課題へとひろがることになった。留学生の支援にも結びついているのである。

現在の高松さんにとって「色覚マイノリティ」であることは「人生の大切な一部分」であり、「社会へ向けてそれを還元していくこと」ができる「宝物」である。当事者研究はここまでの射程をもった実践なのである。

---

### ワークショップ ナラティブ・アプローチによる 当事者研究フォーラム 高松里さん

---

#### 当事者研究実践編

向谷地生良さんは、当事者研究の種類を「一人当事者研究」、「マンツーマンでの当事者研究」、「グループで行う当事者研究」に分類しているが、高松さんは当事者と研究に協力するリサーチ・パー

トナーの組み合わせによる、すでに Ver.4 にまで磨かれたペア・フォームという方法について解説してくれた。

参加者はペアになり、語り手は「今気になっている事、自分の人生の中でまだ言語化できていない過去の事、思い出してみたいけど一人ではやりたくない事、というような出来事」について語り、そのストーリーにリサーチ・パートナーはアクティヴ・インタビューを試みるというワークを行った。これが吃音講習会の翌日の夕方まで続く、参加者自身の「語る経験」の始まりであったが、その内容の報告はこの場では割愛する。他日の報告書に譲りたい。

---

## 対談 当事者の語りの意味

高松里さん・伊藤伸二さん

---

### 吃音臨床という異文化

何らかの障害であれ慢性病であれ、世の中には治らない、治せないものがある。吃音も同様であろう。治っていないというのがエビデンスであり、現実である。しかし、どもる状態、症状のみに焦点をあて、少しでも改善しよう、治そうとするのが吃音臨床の大勢である。

「学齢期の子どもに対する指導、訓練について書かれた本には、指導はしたが吃音の症状に変わりがなかった場合の対応については言及されていないのが現状である。それは研究者、臨床家としては誠実に欠けるのではないだろうか。また、吃音の研究者のなかには当事者がいるにもかかわらず、伊藤さんに対する曲解はどこから生じるのか。その背景、論理を知るためには社会学的な分析が必要なのではないか」

高松さんはこう語り、伊藤さんのある種の異文化体験についての言及から対談は始まった。

### どう名乗るか

高松さんが自らの課題について「色覚マイノリティ」と自己命名したように、名前のない課題は、適切な命名によって初めて、その現象が課題として確立される。どういう言葉でその課題を表現するかが重要な観点なのである。かつて伊藤さんは「吃音者宣言」という本を書いたが、現在では吃

音者という言葉を使うことはない。吃音者という言葉には、かつて、「正音者」という言葉が張りついていたからだ。そもそも正音者という言葉は想像上のものでしかないのだが、正しいという話し方、発音をする人を正音者と呼ぶのであれば、どもりは「恥ずかしいもの」、「劣ったもの」、「否定すべきもの」となるからである。

「吃音者」に代わって、「どもる人」を使ってきたが、「どもる当事者」の表現をすることも時にある。自分の課題を研究者、臨床家に委ねるのではなく、自身の課題として向き合うとの決意を込めた表現である。しかし、高松さんは「当事者研究」という言い方は他者との共同作業を求める、開かれた柔らかな表現だが、当事者という言い方は当事者と非当事者とを分断し、「当事者のことは当事者にしかわからない」という主張につながる危険性もあると指摘する。

「どもる人」というような言い方が等身大の姿を表現しているのかと考えるが、高松さんの指摘を真摯に受け止め、適切な言葉、表現を模索していきたい。それは医療、教育の枠組みの中でしか語られてこなかったどもりについて、新たな語りを紡ぎだす試みでもある。どもりの状態、特徴をあらゆる「吃音症状」という言い方は病状という言葉との類比によって成立する言葉である。「治る」という言い方も同様だろう。この枠組みで思考し、語る限り、吃音は病気と同様、治すべきものであると観念されてしまうだろう。どもる人たちの自尊心はそこなわれ、エンパワメントされることもない。

### 当事者研究という語り

高松さんが当事者研究で提示してくれた「困っているリスト」はことばの教室でも取り組める実践だ。担当教員は吃音については学んでも、その子ども自身の課題については無知であろう。自分自身を子どもとの語りに反映させる誠実な姿勢があれば、良きリサーチ・パートナーとなることができるはずだ。リストをあげ、説明していくことで子どもは語る楽しさを発見し、もっと多くの人に語りたいたいと思うことだろう。当事者研究という新たな枠組みでどもる人たちの語りを創造していきたい。人は語りた生き物なのだ。語る力こそが、子ども自身を支える力なのである。